

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00969

研究課題名（和文）難波・大阪湾岸地域における古代・中世史像の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study of Ancient and Medieval Aspects in Naniwa and Osaka Bay Areas

研究代表者

西本 昌弘（Nishimoto, Masahiro）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：00192691

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：古代史学・中世史学・考古学・上代文学・歴史地理学など研究成果を吸収し、総合的な見地から古代・中世の難波および大阪湾岸地域の歴史的様相を再検討した結果、古代難波津は5～6世紀には渡辺津（天神橋付近）に所在していたが、7世紀中葉に三津寺町付近に移動したと結論づけた。これにより、古代難波地域史の軸線が定まったと考える。

また、6世紀に設置された難波屯倉は7世紀中葉に子代離宮に改造されるが、その所在地は上町台地上の高地ではなく、中津川沿岸の低地であったと論じた。上町台地上の高地にあったのは難波大郡であり、その周辺には百済館などの客館も存在したと思われる。さらに、蝦蟇行宮は高津に位置したと推定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学際的な研究成果を総合することによって、難波津の所在地が定まったことにより、古代における難波と大阪湾岸地域の歴史的な変遷過程がより明確に理解できるようになった。5世紀に難波高津宮、7～8世紀に難波宮が造営される背景に、政権の外港であった難波津の移動が影響していることが考えられる。また、難波大郡、難波客館、難波屯倉（子代離宮）などの所在地について通説とは異なる見解を提示できたことは、今後の発掘調査の進展に繋がる可能性がある。古代難波地域は渡辺津（天神橋付近）だけでなく、複数の政治的拠点を有していたことが判明したことで、大阪における新たな文化遺産の発見・創出の動きが強まることが期待される。

研究成果の概要（英文）：By absorbing the results of research on ancient history, medieval history, archaeology, ancient literature, and historical geography, I reexamined the historical aspects of Naniwa and the Osaka Bay area in ancient and medieval times from a comprehensive perspective. As a result, we came to the conclusion that the ancient Naniwa-port existed in Watanabe-port (near Tenjinbashi) in the 5th and 6th centuries, but moved to the vicinity of Mitsutera-machi in the 7th century.

I also argued that the Naniwa Miyake, which was built in the 6th century, was remodeled into Koshiro Imperial Villa in the middle of the 7th century, was located on the lowlands along the Nakatsu-river. Naniwa Ogori was located on the highlands of the Uemachi plateau, and it is believed that guesthouses such as the Kudara-kan also existed in the surrounding area.

研究分野：日本古代史

キーワード：古代難波津 渡辺津（天神橋付近）説 三津寺町説 古地理変遷図 難波屯倉 難波大郡 蝦蟇行宮 後期難波宮

1. 研究開始当初の背景

古代の難波地域は、5世紀以来、ヤマト政権の王宮や外港たる難波津が営まれ、7世紀以降、副都の難波宮が造営されるなど、政治・経済・交通の重要拠点として発展してきた。しかし、長岡遷都・平安遷都を機に、9世紀以降、難波地域の都市機能は衰退していったという通説に影響されて、平安時代以降の難波地域に関する研究は近年に至るまで低調であった。研究代表者の西本昌弘は、古代・中世史料と古地図資料の掘り起こしにより、こうした通説に異論を唱えてきた。これまでに西本が蓄えてきた研究成果に加えて、難波地域に関わる考古学・上代文学・歴史地理学の研究成果を吸収することで、近年の研究状況を一步でも先に進めたいと考えた。折しも、大阪歴史博物館に関わる研究者を中心とする共同研究によって、難波地域の新たな古地理変遷図が提示され、その後も修正・補訂案が次々に公表されている。この好機を捉えて、古代・中世の難波地域像に再検討を加え、この地域の首尾一貫した歴史像の解明に資することを企図した。

2. 研究の目的

西本は2015～2017年度に科研基盤研究(C)「古代難波地域像の再構築 近世絵図資料と中世史料の検討を通して」を得て、難波地域に関する近世絵図資料を解読して、古代・中世に遡る地名・地形を復原するとともに、中世史料(とくに仏教史料・聖經史料)に遺存する古代地名・古代寺社名を検討して、難波地域に存在した古代・中世寺院の内実を探った。この作業をさらに継続するとともに、近世から昭和戦後期にいたる研究史を参照することによって、より効果的に古地名・古社寺の存在を見出すことができることが判明した。

本研究では、古代史・中世史に関する文献史料を博搜するだけでなく、上代文学の研究成果を吸収して、『万葉集』などの上代文学に見える難波関係史料を吟味する作業を行う。あわせて、考古学の発掘成果を再検証することにより、難波地域における都市的発展と大阪湾岸地域内での交通・交流の様相を復原する。さらに、歴史地理学の見地から、難波地域の古景観や大阪湾岸地域の水陸交通路を復原することを通して、この地域の開発・交通のあり方を考究する。要するに、文献史学の古代史・中世史の他、上代文学、考古学、歴史地理学などの研究手法を統合し、学際的な見地から研究成果を生み出すことにより、古代・中世の難波を中心とする大阪湾岸地域像に再検討を加え、政治・経済・交通の中核としての大阪像を再構築しようとするものである。

3. 研究の方法

本研究では、古代・中世の難波・大阪湾岸地域像を解明するために、古代史・中世史だけでなく、考古学・上代文学・歴史地理学の研究成果を吸収し、総合的な見地から課題解決に向かうアプローチをとることとした。具体的な研究方法は以下の通りである。

(1) 古代・中世史の研究成果確認

近世地図史料による地名・地形復原

大阪市内では近代以降の開発により、小字を含めた地名の消滅が著しい。また、河川改良や埋め立てにより、海岸部の地形が大きく変わっており、古代・中世の地形を復原することが困難である。こうした難点を克服するために、近世の絵図類や明治期の地図を検討して、古代・中世に遡る歴史情報を読み取り、この地域の歴史像を復原する手がかりを得る。

中世難波関係史料の再検討

大村拓生氏や吉川真司氏らの研究によって、中世史料の中に古代に遡る寺院名や地名が多く確認できることが明らかにされた。こうした研究成果を参照しながら、北野社一切経・多田神社文書・崇禅寺文書など各種の中世文書を調査するとともに、『大日本古文書(編年文書)』『新修大阪市史』史料編などを網羅的に検索することで、これまで見逃されていた手がかりを収集する。

古代難波津の位置を究明する。

古代難波津の位置を確定することは、古代史上における最大の懸案の一つである。古代史・中世史・考古学・上代文学・歴史地理学の研究成果を総合的に検証しながら、現在有力な北浜(高麗橋)説・渡辺津(天神橋付近)説・三津寺町説の優劣を見定め、問題解決への道筋を探る。

(2) 上代文学の研究成果吸収

難波行幸歌や河津・川津を詠んだ歌を中心に、『万葉集』の難波に関わる歌を網羅的に検討し、日本史学・国文学の研究成果を総合して、古代難波地域の景観などを考える。

(3) 考古学の研究成果吸収

上町台地周辺と摂河泉における古代官衙や古代・中世寺院の調査成果を再検討し、摂河泉の中での難波の都市的な様相を明らかにする。

(4) 歴史地理学の研究成果吸収

最近提起された上町台地周辺の古地理変遷図を参照しながら、古墳時代から古代にかけての

ラグーンを含めた難波地域の古景観を推定復原し、5世紀から7世紀に至る難波津の位置の変遷について考える。

4. 研究成果

(1)後期難波宮正殿 = 中宮説、蝦蟇行宮 = 高津説、難波津高麗橋説批判

正倉院文書「難波宮例得度注文」の釈文を再検討し、難波宮や平城宮の発掘調査成果を見直した結果、後期難波宮の正殿は大極殿ではなく、中宮と呼ばれていた可能性が高いことを論じた。また、四天王寺北方の上本町遺跡の発掘調査成果を踏まえ、『万葉集』などにみえる「河津」「川津」の語義について、上代文学研究者の研究成果を参照した結果、『日本書紀』孝徳紀にみえる「蝦蟇行宮」は近年有力視される堀江（大川）沿岸ではなく、四天王寺北方の高津町に存在したと考えるべきことを説いた。さらに、1980年代以来、通説化している難波津を高麗橋付近に比定する説について、その根拠を逐一洗い直し、また近世初頭の朝鮮出兵（高麗陣）の研究成果を踏まえて再考した結果、難波津高麗橋説の大きな根拠とされてきた大阪の高麗橋という地名（橋名）は、古代の高句麗館（客館）に関わるものではなく、近世初頭の朝鮮（高麗）出兵に関わるものである可能性が高いことを明らかにした。以上の成果は、これまでの難波を中心とする大阪湾岸地域像にいくつかの修正を迫るものであり、これをうけてさらに大きな成果に結びつくことが期待される。

(2)古代難波津の位置究明

難波津高麗橋説を批判したことを承けて、難波津渡辺津（天神橋付近）説と三津寺町説にも本格的な検討の手を加えた。古代難波津の位置について、かつてまとめた1950年代までの研究史に加えて、1960年代以降の研究史も総括しつつ、渡辺津（天神橋付近）説と三津寺町説の根拠とそれに対する批判などを吟味した。合わせて三津寺（三寺）に関する中世史料を新たに掘り起こすとともに、近年大阪歴史博物館などが公表した難波地域の古墳時代後期と古代における古地理図を参照しながら、古代難波津の歴史的変遷を考察した。その結果、5・6世紀の古墳時代には難波津はのちに渡辺津が設けられた天神橋付近に存在したが、7世紀以降は三津寺町付近に新たな難波津が設けられたという結論に達した。これまで有力視されていた二説はいずれも誤りではなく、渡辺津（天神橋付近）説は5・6世紀の難波津、三津寺町説は7世紀以降の難波津の所在地を指摘したものであったということになる。本研究の主たる課題の一つは難波津の位置究明であったが、この結論を得たことで、当初の目的の多くが達成されたと思われる。

(3)難波屯倉（子代離宮）・難波大郡の位置推定

難波津が三津寺町に移されるのは7世紀であると結論づけたが、それが7世紀のどこまで遡及するのかが課題として残されていた。そこで、『日本書紀』安閑天皇元年条にみえる小墾田屯倉・桜井屯倉・難波屯倉などが、その後、小墾田宮（寺）・豊浦宮（寺）・子代離宮などに改造され、王権の重要施設として利用され続けることを、発掘調査成果も加味して考察した。難波屯倉に関しては、直木孝次郎氏の先駆的な研究以来、これを上町台地北端の難波宮跡で検出されている難波宮下層遺跡に比定し、難波大郡・小郡や客館などとの同一性・一体性を認める見解が通説化しているが、農地を主体とする難波屯倉が上町台地上に存在したとは考えられず、通説の見方には大きな疑問があることを述べた。難波屯倉（子代離宮）はのちの西成郡狭屋部邑（讃楊郷）に属したが、東生郡に属した生国魂神社の社地は豊臣期大坂城の大手門外に想定することができるので、難波宮下層遺跡の場所は東生郡に属すると考えざるをえず、やはりここに難波屯倉を比定するのは難しいと考定した。上町台地北端の高所はむしろ難波大郡の所在地と考えた方がよく、この周辺には百濟館などの客館も設けられていたと思われる。この大郡は大化改新時に大郡宮に改造されるので、7世紀中葉までは難波津・大郡・客館のいずれもが渡辺津（天神橋）周辺に存在した可能性が高いと結論づけた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 西本昌弘	4. 巻 47冊
2. 論文標題 桜井屯倉・小墾田屯倉から豊浦宮（寺）・小墾田宮（寺）へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 考古学論攷（榎原考古学研究所）	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西本昌弘	4. 巻 21号
2. 論文標題 難波屯倉と難波大郡	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 古代史の研究	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西本昌弘	4. 巻 285号
2. 論文標題 古代難波津の歴史の変遷 - 難波御津（大津）から難波三津（御津）へ -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ヒストリア	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西本昌弘	4. 巻 70巻4号
2. 論文標題 難波津高麗橋説批判	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西大学文学論集	6. 最初と最後の頁 27-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西本昌弘	4. 巻 421号
2. 論文標題 蝦蟇行宮・高津・難波市	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 続日本紀研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西本昌弘	4. 巻
2. 論文標題 後期難波宮の中宮について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中尾芳治編『難波宮と古代都城』	6. 最初と最後の頁 149-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 西本昌弘
2. 発表標題 屯倉から王宮・寺院へ - 小墾田・桜井・難波の屯倉を事例として -
3. 学会等名 都城制研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 西本昌弘 (編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 都市と宗教の東アジア史	

1. 著者名 西本昌弘	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 275
3. 書名 平安前期の政変と皇位継承	

1. 著者名 西本昌弘、森明彦、二星祐哉、藤井貴之、並河暢子、和田行弘、石田淳子、中西正和、榎村寛之、内田正俊、笹田遥子、波々伯部守、寺西貞弘、山口哲史、家村光博、三好順子、櫻木潤	4. 発行年 2020年
2. 出版社 塙書房	5. 総ページ数 317
3. 書名 日本古代の儀礼と神祇・仏教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------